

口で毎日 4.0mgであつた。最少有効量以上に於て、全例正常の着床を示し、以後継続投与により正常の発育をとげた。それ以後の妊娠維持の最少有効量は比較的少く皮下注射で毎日 0.03125mg、経口で毎日 2.0mgであつた。Term に達した動物は帝王切開による必要があつたが胎児の発育は正常であり、これ等の子兎は以後正常に繁殖せしめ得た。Perineal Distance により男性化の有無を判定したが僅か1%にすぎなかつた。母兎に対する毒性作用副作用は認められなかつた。以上の結果によりこの Compound はよき Gestagen であると言える。吸収も早く Progesterone より作用が強く経口よりも皮下注射による方法が作用が強いと言へる。子宮内膜に対する作用、Blastocysts に対する作用より判断すると、皮下注射の時は皮下注射の Progesterone の約20倍、経口では約5倍も強い。

臨的に流産に対する効果の判定は症例群により自然流産率の変化が大である事、治療開始時期により効果が異なる等の関係で判定は比較的困難な為、本研究は Primary Habitual Abortor であり Incompetence Cervi 其他の原因を持たない68例について観察した。治療前は278回の妊娠によつて0%の Fetal Salvage であつた。治療後は68回の妊娠によつて62名の生児を得ており Fetal Salvage は約91%であつた。成功例は毎日5mgの Compound を妊娠第6週間より始め第16週以上継続せるものである。不成功に終つた例は投与開始時期が第8週以後のものが比較的多く、切迫流産の症状が出てから投与を開始したものが約60%であつた。

長期投与により母体は何等の中毒或は副作用を示さず32名の女児全例に男性化作用を認めなかつた。中2例に於て投与は第9カ月まで持続せられたに限らず男性化を示さなかつたのは注目に値する。

以上の結果により Habitual Abortion の大部分に Progestational Compound の投与は合理的であり有効であると言える。

181. 子宮頸癌発生過程に於ける核容積並びに DNS 量に関する顕微光測法的研究

(ソウル大学校医大) 羅 建 栄

子宮頸癌発生過程に於ける核容積並びに、DNS 量の変動を観察するために、正常上皮、異常上皮、不穩上皮、異型上皮、浸蝕前上皮及び、浸蝕癌等を区分して、選定した後、基底細胞、旁基底細胞の核容積を、L-linear-Method で測定し、他方 Feulgen 染色後、顕微

光測法にて、DNS 量を測定した。

結論：

1. 正常上皮の基底細胞と、旁基底細胞の、核容積比は、1:2でDNS量には変動を認めず。
2. 異常上皮の核容積は、顕著な増大を認めるが、DNS量には変動を認めず。
3. 不穩上皮の旁基底細胞の核容積は、なお一層、増大し、DNS量は、倍加している。
4. 異型上皮に於ては、核容積は、前者を、大差なきも、基底細胞、旁基底細胞の染色体数が、倍加している。
5. 浸蝕前上皮に於ては、核容積は減少し、基底細胞のみならず、旁基底細胞の4倍数染色体が、半減す。
6. 浸蝕癌に於ては、DNS量の変動がはげしい。

182. 子宮頸癌診断に於ける生検組織擦過塗抹法の重要性に就いて

(ソウル大学校医大) 金 錫 煥

目的

子宮頸癌診断に於て生検法を、行つた時細胞診に依り、成るべく短時間内に且つ正確に診断を下すを目的とする。

方法

組織切片についで血液及び分泌液等を除去した後、載物硝子上に載せて成るべく組織の全面を擦過して塗抹標本を製作し直ちに固定液に入れる。次いで Papanicolaou 氏染色法を行い鏡検す。

結論

1. 本法は、腔内容及び子宮頸部擦過塗抹細胞診より、遙かに正確な所見を、1時間以内に提供し、其の的中率は98.4%である。
2. 非癌組織片では、蜂巢状上皮細胞群が93.2%に於て出現するに對し、癌組織片では僅か17.2%しか、出現するに過ぎぬ。
3. 子宮頸部の細胞診と生検法施行に際しては、本法に依る細胞診の同時施行を欲奨す。

183. 1955—1962年間省立台北医院にて治療せる trophoblastic Diseases 患者の臨床統計的觀察

(中華民國台湾省, 省立台北医院)

徐 千 田, 張 簡 敏 雄, 董 伯 勳
賴 焜 燾, 楊 啓 洲, 陳 景 川

135名の trophoblastic diseases の中 108名 (80.0%) Follow-up が可能であつた。その結果を要約すると